



## 小特集

# 恭仁涼子詩集『アクアリウムの驕り』

恭仁涼子詩集『アクアリウムの驕り』が出た

坂口安吾を読み、無頼の愛に憧れる恭仁涼子は  
詩人Nとの偶然の出会いに導かれ  
東京神楽坂で奇妙な詩人たちの一団に出会い  
自らも詩を書き始める

この詩集は人魚の軌跡  
瞼を閉じて読まねば  
砂の小粒が目にも染みる

恭仁涼子「アクアリウムの驕り」を読んで	荒川純子	p1
詩人の指紋	小川三郎	p3
指先の感覚 — 恭仁涼子『アクアリウムの驕り』を読んで—	関根悠介	p4
神秘的な世界	堀千恵	p6
祈りとしての黒 ~ 恭仁涼子詩集『アクアリウムの驕り』に寄せて~	前田珈乱	p8

## 恭仁涼子「アクアリウムの驕り」を読んで

荒川純子

はじめてお目にかかったときから、恭仁さんはナチュラルだった。私と年齢差があるにもかかわらず普通におしゃべりでき、現代(いま)流行りの話題もきちんと抑えているし、SNSも使いこなす。それに文学にはとびきり詳しいし前向きだ。恭仁さんは私にとって大切な詩を書く仲間だ。

その恭仁さんが詩集を出した。この「アクアリウムの驕り」は恭仁さんの違った面を知れる一冊であり、読みすすむうちに恭仁さんの魅力のどんどん伝わってくる。

いくつかの作品の中で、生きる場所や場面の変化が書かれている。遠くと近く、月と地球、在職と退職、産まれる前のお腹の中と外、ゲッター(女の人しきない場所)と外、海の近くと海から遠いところ、父親が生きていた時とその後…。

恭仁さんの作品には、等身大の自分、楽だと思ふ生き方や好きなものを取り入れ、今の自分自身を大切に思う姿がうかがえる。それは読み手側には登場する人間たちやその空間、場所が想像しやすく入り込みやすい。簡単に言えば、読みやすい。「詩」であればその短い作品の中に場面や人間関係、感情、を盛り込むほど複雑な作品になってしまうが、それをわかりやすくナチュラルにやっつの



けるのが恭仁さんだ。

郷愁の満ち引きは、軋んでゆく音とおなじだ／ぎしり ぎしり／私はその音を哀しく聴いていた  
ぎしり ぎしり／圧倒する祈り／白や黒の、まるい、嵌めこまれた祈り／先程歩いて行って触れた地  
点は、もう貝と一緒に水没してしまった(「コインと」一部引用)

腰まで水浸しの私に慣れた／あなたはそれでいいと言いながら／満足げに ふつり とどこかに消  
えてしまった(「ミヤウジャウ」より一部引用)

「コインと」「ミヤウジャウ」読んだあたりから、アンデルセンの童話「人魚姫」が浮かんできた。タイト  
ルの「アクアリウムの驕り」の中の「#真逆の人魚姫」まで読みすすむと、一気に詩の世界が人魚と共  
にドラマティックにひろがっていく。

ほんとうは歌だけを歌いたい／でも、あなたの存在を愛さずにはいられない。／それこそがこのア  
クアリウムの驕り。／あなたの業、私の業。／真逆の人魚姫。

(「#真逆の人魚姫」より最終連)

人間の世界に興味をもつこと(ゲッターの外には「おとこのひと」がいるんだって。「#飛翔あるいは  
浮遊」より)や、王子に恋すること(あなたと花火がみたいだけ「LIKE」にあらずより)、そして声を失い  
足裏の痛みを耐え人間となること(わたしの脚は次第に硬くなり／でもそれはウロコではなくただの  
乳酸で／わたしは人魚にはなれないと実感する「人間のわたし」より)。人魚姫を思わせる言葉が続  
いていく。

イルカと人間が出会った晩に／私のような人間が手ほどきして／水族館から逃がしてあげる／し  
かし、今更どこへ行けばいいのだろうか？／そんな怨嗟の声は、人間のわたしには届かない。  
(「人間のわたし」最終連)

たしか人魚姫とイルカは親友である。そのイルカの不安が人間となった今の自分には届かない悲  
しさと、海にはもどれない自分自身とを重ね合わせる人魚姫の心の叫びを行間に読みとれる。童話  
の人魚姫の最後は泡となり、蝶のように月へと昇っていく悲劇で完結する。「キセキの話をしよう」の  
中では、人魚になったら、水面から顔を出して陸を視よう。と人間側から書いている。ドボン。人魚の  
完成、いっちゃあがり。これは恭仁さんの人魚への憧れ、投影かもしれない。

詩集を読み終えて、人魚が海から陸をみつめていたように、恭仁さんが今の自分と現実の生活、  
詩を書く自分と文学という世界、とを真剣にみつめている姿勢を感じた。

狭いアクアリウムではなく、海という広い世界から飛び出す勇氣ある人魚姫。恭仁さんは「詩」だけ  
にこだわらず「文学」という世界へと思いきり飛び出してハッピーエンドにむかって欲しい。

私には人魚のイメージが印象的だったが、他の作品にも恭仁さんらしい部分もある。  
お酒の好きな恭仁さんらしい言葉を詩集の中でぜひ探してみたい。焼き魚、クリームチーズ、鮭  
とぼ、乾きもん、市役所のカレー、なんだかサラリーマンのお酒のお供。  
親しみやすい日常の場面や言葉をみつけられる。ドラマティックな人魚姫の恭仁さんの違う一面は、  
誰とでも打ち解けられる身近で楽しい女性だ。

最後に、この詩集は現在の恭仁さんを勇氣づける応援団長だ。これからこの詩集を片手に、どんど  
ん文学の世界へ突き進んで欲しいと思う。私は応援団員、そして一緒に応援する団員募集中！(海  
の生物の方も大歓迎！)



## 詩人の指紋

小川三郎

恭仁涼子の第一詩集『アクアリウムの驕り』を読む。現れるのは色とりどりの世界、まさにアクアリウムを見るように、恭仁涼子の世界は色つきで展開していく。アクアリウムだから、それは現実似せてはいても、造られた世界である。そこで起こるのが希望や幸福であるかと言えばそうではなく、哀しみや怒りと言った負の感情であり、そのような感情もまた色とりどりなのである。

アクアリウムを創る恭仁涼子の手は、しかし生身の恭仁涼子の手であり、その指先からは、現実の負の感情が染み出していて、アクアリウムを構成する一つ一つの事物に指紋として付いている。私たちはこの詩集の中で、アクアリウムの様子を見ながら、その指紋を見ているのである。

アクアリウムのあちこちに「あなた」が現れる。アクアリウムの中で動くものはあなただけであり、同時にあなたはアクアリウム自体でもある。無論恭仁涼子もまた、アクアリウム自体であり、しかし恭仁涼子とあなたは全くの対極にあるものだ。現実世界に足りないものを詩で補おうとする時、人それぞれのアクアリウムが出現する。ここでは「あなた」＝「アクアリウム」の形で現れ、いつの間にかその中心には、佇む恭仁涼子の姿がある。

あなたで満たされた世界、あなたが醸し出す哀しみで満たされた世界。瞳にそんな世界を映しながら、そして心を深く傷つけられながら、恭仁涼子は微動だにしない。その姿をまた、アクアリウムの上から恭仁涼子が見ている。こちらもまた、微動だにしない。どんな哀しみが襲おうとも毅然とする強さはアクアリウムの中に限定されたものだが、そこには一種のマゾヒズムも香っている。もっとカラフルな哀しみに、踊り出したくなるような残酷さに身を晒そうと腕を広げ、その時詩人の姿は一際光を放つ。

アクアリウムは、恭仁涼子の記憶から抽出された眩い雫だけで構成された新たな混沌である。そこでは少しずつだが新しい言葉も生まれている。アクアリウムという造られた混沌の中でも新しいものは生まれるのだ。詩人は言葉を作りあげる。それは詩人の指紋である。詩人となるべく恭仁涼子はこの詩集を編み、そこかしこに指紋を踊らせ、まさにこの瞬間詩人となろうとしている。やがて読む人の指紋と、また「あなた」の指紋と重なり合うまで、恭仁涼子の詩作は続いていく。



## 指先の感覚

—恭仁涼子『アクアリウムの驕り』を読んで—

関根悠介

恭仁さんはエネルギッシュな人だ。

僕も参加しているオンラインの詩の合評会(コロナ禍以前はオンラインではなかった)「詩の京都旅行」「未来詩人講座 TOKYO」「Tricky Queen 横浜 season2」では毎回と言っているほど作品を提出されている。そのバイタリティ(ここでは書く姿勢、書き続ける体力という意味合い)にはいつも敬服している。それはこれを書く前から、又この詩集を読む前から思っていたのだが、あとがきにもご本人がご自身のバイタリティについて「我ながらバイタリティがすごい」と書かれていることから分かる。「呪い」や「リミット」を自力で外し「自分の世界を自分で作る」には、途方もないエネルギー量が必要なのだ。そのエネルギー量は時として否定的、攻撃的、破壊的な形にもなる。ダダイズムのように。

まだコロナ禍以前の合評会で、二次会が終わったあと、堀さんと恭仁さんと三人で三次会に行った。これは惨事会になるな、という予想的中し、惨事会では物足りず四次会へ。四次会という名の惨事会ではカラオケで徹夜。朝4時ごろめに赤ワインを一本あけるといふ。僕は若いころからライブでじゃんじゃん歌っていたので、たくさん歌うことには慣れているのだが、おそらく曲数で言ったら、恭仁さんには負けたと思う。恭仁さんは顔色ひとつ、声量ひとつ変えず始発まで飄々と歌っていた。

ほんとうは歌だけを歌いたい。(「アクアリウムの驕り」より)

書くという行為は身体に依存している。身体がなければ書くことは出来ない。その身体が持久力を持っているなら、それはひとつの大きな才能であるだろう。僕は自分の持久力、身体感覚、皮膚感覚に自信がない。しかし恭仁さんにはそれがある。羨ましいと思っている。

恭仁さんの詩は語り手の身体とふれ合う形で作品世界が描かれていることが多い。そのなかでも「I 月より多い」から「指先」をテーマにしたものをいくつかあげてみたい。

指先がまっかになったので  
水道を探して歩いていたら  
こんな遠くに来てしまいました  
「寄る辺のない」より

屈みこんで、指先でつまむ  
小さな赤のまま、ぽつりと落ちた線香花火  
幾度もつける 覗きこむ  
その赤は、ふと私の睫毛に灯ったようだ  
のぼり、のぼり、私の瞳にぽつと飛び込む  
目をつむり、明滅した光を瞳のうしろに飼う  
「LIKE にあらず」より

家の屋根にレジャーシートを敷いて  
十本の指をひとつずつひらいていく



「LIKE にあらず」より

圧倒的リラクゼーション攻撃。  
 じゃっかん指先がしびれると言ったらこれだ。  
 乙女が僕の手を揉みこんでいる。  
 「グローリア」より

私はまっさおの水平線を  
 ただ指でなぞったのでした  
 (中略)  
 今はただ、静かに眠っている島の  
 息吹が指先に遊びとまりました。  
 「島」より

きみは世界のはしっこはしっこを  
 上手につまんで折りたたむ  
 「くしゃくしゃしてほい」より

つまみ、離し、その指先を笑う。  
 「整った庭は時折私を笑わせてくれる」より

「指先」は創造行為の原点だ。イメージは頭かもしれないが、頭のなかに浮かんでいるだけでは、今のところ作品を作り出すことは出来ない。詩も音楽も絵も指先をつかうことで作品を生み出すことが出来る。

指先以外での身体とふれ合う形での作品世界の創造という意味では、

右ほほを氷枕に押し付けて寝ころび左ほほのはす向かいの満月を眺める  
 「月より多い」より

という表現が僕は個人的に気に入っている。

恭仁さんの詩集『アクアリウムの驕り』を読んで、僕はしばらくふれていなかった楽器にふれてみた。指先の感覚を大切にしながら。そして音楽と詩の関係性についてまた深く探っていきたいと思った。



## 神秘的な世界

堀千恵

恭仁涼子さんとの出会いは約2年ちょっと前。もっと前から知り合いのような気もしていたのですが、あれは、2019年11月9日(土)関根悠介さんに紹介していただき、とりQの2次会に参加させていただいた時のことです。私が緊張していると、恭仁さんはふわふわとした雰囲気、何でも相談できる近所のおばさんのような、と言っても私より若いのですが、とても安心感のある方だったことを覚えています。そして、おとなしい方と思っていたら話し出すと止まらなくて、芯が根強い方だった印象を覚えています。その根強さは朝まで続き、その日は、何であんなに音楽の話で盛り上がったのか覚えていないくらい、3人で居酒屋の梯子をしてから朝までカラオケコース。恭仁さんは初めての体験と仰ってましたが、まだまだ時間が足りないくらい恭仁さんと関根さんは競い合うように歌っていました。そんな思い出もあるからなのか、それとも元々持っている彼女のふわふわとした明るさや嘘のない言葉に引き寄せられてなのか、もうずっと前から知り合いのような仲間が、詩集を出版されたと聞いてとても嬉しい気持ちです。

恭仁涼子さんの詩を初めて読ませていただいた頃からずっと、〈月〉〈海〉〈祈り〉のイメージが印象にありました。色で言うと紺やブルー系の色で、澄んでいるブルーというよりは深さを感じる濃いブルーが漂っていました。今回の第一詩集『アクアリウムの驕り』のカバーからもそれらの印象が浮かび上がっていて、詩集の中にもキーワードのように幾つもの〈月〉〈海〉〈祈り〉が散りばめられ神秘的な物語に出会うことができました。ただ神秘的ではなくて、不思議な感覚へと連れて行ってくれるのです。それは、日常からつまみとった身近にある出来事かと思っていれば、いつの間にか急に宇宙にワープしていたり、海面や海の底にいるみたいになり、まるで夢の中を見ているような感覚になるのです。お芝居で例えると、照明が急に変わったり、急に暗転して場面が急展開するかのようで、読み手にとっては驚きの連続でした。また、たまにゾツとするような言葉が頭に残り忘れられなくなるのです。

1作品目の『苦水』からゾツと驚かせていただき、好きな詩でした。

一連目「焼き魚と目が合った」と2連目の「内臓ごとまるっと、顔と骨だけ吐き出してそいつを食べた」の言葉にはゾツとした。しかし、焼き魚が食卓にあり、顔と骨だけ食べる。それは日常にある風景だった。確かに焼き魚は死んだ魚であり、それが運命なのかもしれないが、生き物を食べるときに感謝の気持ちを抱く方が多いと思う中、こちらの作品では三連目に「感謝などしない」とある。すごいインパクトを感じた。確かに普段気にせず食べていると、“感謝”は無意識に忘れてしまうかもしれない。しかし、果たして魚は「死ぬために生まれてきた＝それはご褒美」なのかなと考えると、魚の苦い思いというより、“私”のなんだかんだ魚を想う苦い気持ちが、投げつけられたコルクに込められていると感じた。

以下、(『苦水』第一連、第二連)

食卓で焼き魚と目があった

これはごほうびなのだ、とそいつが言った。

長い旅だった

その土産話を聴きながら、私はグラスを傾ける

思えば 死ぬために生まれてきたのだ

ザッツ・オールなどと言えば聞こえはいいが

ただそれだけ それだけしかない



グラスに氷を放り込んだ  
 そいつの話の退屈さに飽きてしまった  
 内臓ごとまるっと、顔と骨だけ吐き出してそいつを食べた

### 『月より多い』

この詩を読んでいて、月よりも何が多いのだろうと何度も読み返した。読むたびに、ボトルが汗をかき姿や水滴の情景が浮かんで来て、日常にある光景を思い出した。一連目と二連目をイメージしながら、満月を眺めながら氷水を見る気持ちとはどういら心情かを考え、実際に寝て体験してみたりもした。すると、私は一連目の「ボトルいっぱい氷水を見た」から、氷水は過去を表していて、その先の満月には未来が描かれているのではないかと感じた。過去(氷水)が溶けていき、きっと新しい発想や希望、未来が水滴へと表現されている詩だと私は感じた。地球では月よりも出会う場があり、動物や人の温もりも多い。その逆に出会いと別れも多くある代わりに傷もある。まんまとした水滴が平和の象徴のような気がして、短い詩の中に多くの意味が含まれていて、心温まる作品だと感じた。

また、大嫌いでであろう蟬の存在と鈴虫を描くことで温度感も伝わり面白い作品だと感じた。

以下、『月より多い』第一連、第二連、第三連  
 ボトルいっぱいの氷水を見た

右ほほを氷枕に押し付けて寝ころび左ほほのはす向かいの満月を眺める

暑い部屋だから、窓を大きく開け放っている  
 死ね死ねゼミはここにはいないようだ  
 たた鈴虫とスイッチョン、それから扇風機が首を振る音だけ

### 『太陽、入滅、墓守』

#### 『突然許した』

この2つの詩からは、子である恭仁涼子の存在が描かれていた。遠回しではなく、真っ直ぐな思いが込められていると感じた。特に印象的だったのは、『太陽、入滅、墓守』第四連「あたしはただ草を祈りごとむしり取りながら、毎年恒例の遅すぎる願い。」、最終連の「突然許した」の表現だった。特に最終連は、スペースを使い、一文字一文字のインパクトが大きく、想いの強さを感じることができた。自分が抱く父への愛情を知ることができ、また父からの愛情を受け入れられたことが伝わってきた。この2つの詩は大事に育まれた詩だと感じた。

以下、『太陽、入滅、墓守』第四連  
 もうこの墓を守るのはあたししかない。  
 百円ライターで親指を炙りながら父を思う。  
 父の葬式中、祖母は晴れ晴れした顔で言った。  
 よかった。死んでくれて。  
 あたしはただ草を祈りごとむしり取りながら、毎年恒例の遅すぎる願い。

以下、『突然許した』最終連  
 突 然 許 し た



恭仁涼子さんの詩にはやはり物語が見える。まるで海のように広がっていき、一体この先何が起こるのだろうかと神秘的な感覚へと導いてくれると私は思う。そして恭仁涼子さんの作品は一人芝居のような情景も浮かび上がらせてくれると感じた。詩を読んでいくうち読み手はどんどん物語に入り込み、跡形もなくこの世界に飛び込んでいる感覚となった。私はその一人で、いつの間にか、詩の1行1行が台詞のようになり口ずさんでいた。

『キセキの話しよう』の最終連「人魚には足跡は残らない。」と終わる言葉が、これから先のキセキを感じさせてくれるようだと私は感じた。

このように、第一詩集を読ませていただき、感想や批評を書かせていただいたことが、私にとって一つのキセキだと感じました。第一詩集おめでとうございます。

## 祈りとしての黒

～恭仁涼子詩集『アクアリウムの驕り』に寄せて～

前田珈乱

恭仁涼子氏第一詩集『アクアリウムの驕り』、祈りに満ちた詩集である。それは時に愛情としての祈り、「でも、あなたの存在を愛さずにはいられない」（「アクアリウムの驕り」より）、時に死者への祈りとなり、「どうか、誰の悪意をも素通りして、自由に生きてください」（「太陽、入滅、墓守」より）、性質として詩集の核となっている。

祈りの発生の源は、祈りの性質と反対の極にある。『アクアリウムの驕り』は同時に表面上の明るさ、熱さ、積極性に対する憎悪に近い感情で満ちている。恭仁氏は積極性というものが積極性を有するがために抱える暗黒を巨細となく把握している。「花には責任がある／ひまわりが背負ったそれはビタミン剤みたいな何かで／元気勇気活気／まばゆさ／上を向くこと／希望の道を迷わずまっすぐ進むこと」「ひまわりだってあの日／影を地面に焼き付けたはずだ」（ともに「影」より）。彼女はその暗黒の側にもまた視点を置いているように思われる。

暗黒が明るい世界を片目で見ながら吐き出す冗談をブラックジョークと我々は呼ぶ。恭仁氏の詩作品は性質的にはブラックジョークに近い。彼女の作品の触感はライトである。事象の裏側のネガティブな要素を軽く紡ぐ。ジョークは軽いものだが、ブラックジョークの軽さがなにゆえ際立つかといえば、それが抱える負の状況との落差のためである。

ブラックジョークは、ネガティブな状況に置かれたとき、それを踏まえてなおポジティブに行動するための人間の進化の結果かもしれない。恭仁氏の場合それは祈りという形態をとり、彼女の精神を停滞から前進へと転化させているのだろうか。彼女の祈りは表層から内奥を貫く。ばかりでなく、地底にあっても飛翔を図る。『アクアリウムの驕り』、そういったまなざしを秘めた詩集である。